『失楽園』におけるアダムの再生

杉本　誠

『失楽園』第10巻，11巻，12巻を人間の再生のドラマとして見る時，ミルトンが『キリスト教教義論』第1巻で説く再生の段階的過程を，この最後の3巻におけるアダムの再生の過程に重ね合わせ，両者のそれぞれの段階を対応させて読むことが，『失楽園』の理解を深めることは言うまでもない。そこで小論では，『失楽園』におけるアダムの再生の過程を『キリスト教教義論』の再生に照らし合わせて考え，彼の再生が，神の救済の意志というコンテキストの中で，「真の愛」の回復に向かって進んでゆく過程であることを，「悔い改め」と「信仰」という視点から検討してみたい。

再生の過程には段階がある。その出発点は，アダムとエバが非難の応酬をし，罪の裁きを受けたあとの，アダムの絶望的な悲嘆の独白（X，720-844）に見られる。ここで彼は，堕罪の責任が自分にあり，自分だけが罰を受けるべきであるということを述べている（X，829-34)。これは「罪の自覚」(conviction of sin) である。それは，ミルトンが『キリスト教教義論』で言うように，「悔い改め」(repentance) の最初の段階である。[1]ファウラーによれば，アダムは罪の裁きを宣告された後の，長い嘆きの最後の部分（X，828-44）で，自らの「罪の自覚」に至る。「罪の自覚」は，『キリスト教教義論』でミルトンが述べる「悔い改め」の5つの段階，即ち，「罪の自覚」，「悔悛」(contrition)，「告白」(confession)，「悪からの離脱」(departure from evil) 及び「善への転向」(conversion to good) のうち，第1のものである。[2]ここにアダムの再生の可能性の最初のきざしが見られる。彼の絶望は，そのあとの第2の独白(X，854-62)，及びエバへの激しい非難のことば（X，867-908）においてもなお続く。その中で彼は

> But for thee
> I had persisted happy,　(X, 873-74)
>
> お前さえいなかったら
> 私は幸せであったのに

と言って，エバの存在を呪い，遂には，女性を創造した神のわざを冒瀆するところにまで至っている。

ここまで来て，アダムの再生への可能性を現実のものに変えるきっかけとなるのは，アダムの侮辱と憎しみのことばに答える

Forsake me not thus, Adam,
アダム，私をそのように見捨てないで下さい

で始まるエバの嘆願（X，914-36）である。これは，ジョセフ・サマーズも言うように，『失楽園』の転換点である。[3] この転換点を作り出すのは，激しく醜い感情から立ち直ったエバの，真実な人間愛である。

...witness heaven
What love sincere, and reverence in my heart
I bear thee, and unweeting have offended,
Unhappily deceived... (X, 914-17)

天も御照覧下さい。
私があなたに対して，どれほど真実な愛と尊敬の思いを心に
抱いていることでしょう。そしてまた，私が知らぬ間に，
不幸にもだまされて罪を犯してしまいましたことを。

エバがアダムに対して抱くこの愛が，アダムの中にあわれみと愛の気持ちを生じさせ，これがアダムの罪の状態からの回復の最初の力となるのであり，究極的には，アダムの再生は，彼が「真の愛」の回復に向かって進んでゆく過程なのである。

ここではまだ，エバの意識の中には，神への従順こそ真実な愛を可能にするものであるという理解は十分回復されてはいない。しかし，ここには夫であるアダムへの妻としての従順がある。そしてそのことによって，二人の間に男女の創造の秩序が取り戻される。その意味において，このあとの回復の過程で主導的な役割を果たすのはアダムである。彼は，エバが自分ひとり罰を受けたいと願うその懇願を斥けるばかりではない。エバの自殺や避妊の提案を正しい判断によって思いとどまらせ，また，エバの子孫が蛇の頭を砕くという，宣告の一部をエバに思い起こさせるのはアダムである。この秩序の回復によって，初めて彼らは神の前にへりくだって赦しを乞い，神との和解を願うことができる状態になる。アダムが先に立って二人は裁きの場に急ぎ，神の前に悔い改めて祈る。

エバのへりくだった姿によって心を動かされ，神の裁きに従おうとするアダムは，神の裁きそのものが，予期に反して如何に寛容であったかに気付き始める。これがアダムとエバの再生の

始まりである。ティリヤードはこの堕落した二人の再生の過程が，第10巻の初めにおいて，キリストが二人に裁きを下すと同時に，二人をあわれんで衣を着せてやるところで，すでに始まることを指摘している。(4) たしかにキリストのこのあわれみがなければ，堕落した二人は再生に向かうことはできない。しかし，まだキリストによる贖罪を知らない人間が，自分なりの努力でお互いに和解し，そこから二人で神に赦しを乞う気持ちになっている点にも注意をしたいと思う。

アダムとエバの和解は，『失楽園』の真のクライマックスであるとティリヤードが言うほど，それは美しいものであるが，もちろん，二人が和解しただけでは，彼らの愛は在るべき状態に回復したとは言えない。いったん堕落した人間の愛は，それが或る瞬間にどれほど真実で美しいものであっても，神から離れている限り，直ちに情熱に支配され，彼らの愛が相互の非難と憎しみに変わることは，彼らが経験によって学んだところである。人間を超える，より大きな力が彼らに働かなければ，もっと正確に言えば，より大きな力が彼らに働いていることを知り，それに彼らが応えるのでなければ，堕ちた人間は同じことを無限に繰り返して，そこから回復する望みを持つことはできないであろう。つまり，神への従順を抜きにした人間の愛は，必ず破綻をきたすということである。それゆえに神は，人がその自由意志をもって罪の状態から立ち直り，神と人への愛を回復することができるように，恵み (grace) を送るのである。

アダムが「先行する恵み」(Prevenient grace XI, 3) の力によって祈る場面は，第10巻の終わりで，次のように描写される。

What better can we do, than to the place
Repairing where he judged us, prostrate fall
Before him reverent, and there confess
Humbly our faults, and pardon beg, with tears
Watering the ground, and with our sighs the air
Frequenting, sent from hearts contrite, in sign
Of sorrow unfeigned, and humiliation meek.　(X, 1086-92)

われわれにできる最善のことと言えば，
神がわれわれを裁かれたところへ戻り，
うやうやしく神の御前にひれ伏し，そこで謙虚に
自らの罪を告白して赦しを乞い，偽りのない
悔悛と柔和な謙遜のしるしに，
悔いた心から出る二人の涙で地面をうるおし，
二人の溜息で大気を満たすことではないだろうか。

ここでアダムが到達している段階が 'confess', 'hearts contrite' などのことばからも判断できるように,「悔悛」及び「告白」であり,ミルトンが『キリスト教教義論』で説くところによると,それぞれ「悔い改め」の第2,第3の段階である。(5) アダムは,はじめの「罪の自覚」から,「悔い改め」のこの段階にまで進んでいることがわかる。さらに,ここで神の赦しを乞うというこの祈りの行為が,裁きの場に赴く行為として,アダムによって理解されていることに注意する必要がある。

アダムの神の愛とあわれみについての理解の深まり,とりわけ,それらが神の裁きの中にこそ示されるという理解の深まりと共に,彼は真に再生された人間へと変わってゆく。それが上に引用した 'What better can we do...' 以下のことば,及び,それに続く次のことばに見られる。

Undoubtedly he will relent and turn
From his displeasure; in whose look serene,
When angry most he seemed and most severe,
What else but favour, grace, and mercy shone? (X, 1093-96)

神は疑いもなく,御心をやわらげ,不機嫌を
なおされるだろう。神はどんなに激しく怒り,
厳しく見える時でさえも,その静かな御顔には,
ただ好意と恩恵とあわれみだけが輝いていたのではなかったか?

上述の,理解の深まりということは,'Undoubtedly' という,アダムの神に対する強い信頼の気持ちを表わすことばを経て,最後の行において,一つのクライマックスに達するのである。

神への不従順を悔い改めたアダムとエバの二人の内面の転換は,第11巻冒頭に表現される。

Prevenient grace descending had removed
The stony from their hearts, and made new flesh
Regenerate grow instead,... (XI, 3-5)

人間の悔い改めに先行する恵みが降りて,
彼らの心から石のような頑(かたく)なさを取りのぞき,そのあとに
再生の新しい肉を植えつけられた...

ここに「再生の」('Regenerate') ということばが,作品全体で一度だけ出る。この「再生」とい

う神学的概念に関して，『キリスト教教義論』の中で，ミルトンは次のように述べている。

> 人間を回生させようという神の意図は，その人に以前にもまして正しい判断力と自由意志を駆使する生まれながらの能力を回復させようとするばかりか，それは内なる人を新しいものとし，新しくされた人に神の力により新しい神的な能力を与えようとする。これが再生とか，キリストの接ぎ木とも呼ばれる過程なのである。(6)

つまり，再生の経験をもつ人間は，生まれながらの人間とは区別され，神にある新しい創造とされている。第11巻と12巻のアダムとエバは，この段階で「再生」を体験しており，神から二人のところに遣わされた天使ミカエルによる未来史の啓示は，「知識」(knowledge) から「確信」(persuation) に至るアダムの再生の過程のドラマ化であると言うことができよう。その意味で，ファウラーが言うように，第11巻及び12巻を，「信仰」(faith) の段階を扱うものと解釈したい。(7)

さて，「悔い改め」から「信仰」の段階へ向かう場面はどこに見られるであろうか。それは，まず，第11巻初めで，アダムとエバの祈りが終わったあと，ミカエルが到着する前に二人が交わす対話においてである。アダムは言う。

> ...persuation in me grew
> That I was heard with favour, peace returned
> Home to my breast, and to my memory
> His promise, that they seed shall bruise our foe;
> Which then not minded in dismay, yet now
> Assures me that the bitterness of death
> Is past, and we shall live.　(XI, 152-58)

> 自分の祈りが好意をもって聞き入れられたという確信が，
> わたしには生じてきた。私の胸に平和が戻り，
> お前の子孫がわれわれの敵を打ち砕くという，
> 神の約束を憶い出したのだ。あの時は苦悩のあまり，
> これを心にとどめはしなかったのだが，今では
> 死の苦しみは去った。われわれは生きてゆくのだという
> 確信をわたしに与えてくれる。

これより前，第10巻のアダムのことば (1029-35) の中では，女の子孫が蛇の頭を砕くという神の

ことばは，裁きの「宣告」(‘sentence’) の一部として受け取られていた。アダムは，この「先行する恵み」の主題を，ここで再び持ち出すのであるが，これを今，彼は神の「約束」(‘promise’) として理解するのである。このことばの変化は重要である。これは明らかに，アダムが再生の過程でそれだけ進んでいることを示す。「宣告」と「約束」の隔たりは，決して小さいものではない。キリスト教信仰や教義において，「約束」ということばが大きな意味を持つことは，ここに述べるまでもないであろう。そればかりでなく，その約束は自分たちが生きることをも保証するものであることをアダムは理解するに至っている。それを受けて語るエバも，その理解においては次の引用に見られるとおり，アダムと全く同じである。

But infinite in pardon was my judge,
That I who first brought death on all, am graced
The source of life. (XI, 167-69)

万物に初めて死をもたらしたわたしが
生命の源となる栄光に恵まれるとは，
あの審判者が赦しにおいても無限であられるのです。

「宣告」から「約束」への変化，「死すべき者」から「生きる者」への変化は，同時に，神が「怒れる神」(‘offended Deity’ XI, 149) から，「やさしき」(‘placable and mild’ XI, 151) 神に変わることである。

「悔い改め」から「信仰」への発展は，この二人の変化のあとを受けて，それをさらに押し進める形で，彼らの罪からの回復のために語るミカエルの最初のことばにも見ることができる。

Sufficient that thy prayers are heard, and Death,
Then due by sentence when thou didst transgress,
Defeated of his seizure many days
Given thee of grace, wherein thou mayst repent,
And one bad act with many deeds well done
Mayst cover. (XI, 252-57)

お前の祈りは聞かれた。そして，お前が罪を犯した時，
宣告によって下されるはずであった死は，
恵みによってお前に与えられるしばらくの期間，

その力を奪われ，その間お前は悔い改め，
多くのよき行ないをもって，一つの悪しき行為を
償うことができるのだ。

アダムは，犯した罪のために直ちに死すべきものでありながら，「恵み」によって，多くの日々を生きることを赦される，という。そしてまた，彼は生きている間，悔い改めなければならない。それと同時に，犯した罪を信仰の行ないによって償わなければならない，という。信仰の行ないは，ミカエルが最後の訓戒（XII，575-87）の中で強くすすめるように，確信の段階に達して初めて可能となるものである。言い換えれば，それは最終的な「救いの信仰」（'saving faith'）の段階に属するものである。「多くのよき行ない」とは，この一節が言及しているペテロ第一の手紙4章8節に「愛は多くの罪をおおうからです」と述べられている，その愛である。人の罪が赦されるために，神がミカエルを通して人に求めるのは，生涯にわたって罪を悔い改め，そして愛を実践することである。

しかし，アダムはまだここでミカエルの言う「多くのよき行ない」が具体的にいかなるものを指すのか，そして神が自分を死より贖うということがどのような形で実現するかを知らない。このあと第11巻，12巻で，幻と物語りとによって，人間の未来の歴史，即ち，神による人の最終的な救いの計画を示された後に初めて，彼はそのことを知るのである。それは神の愛を示されることである。それは，キリストによる人の罪からの贖いであり，人はキリストのその愛を模範として神と人とを愛してゆく，ということである。

ミカエルによる教育（'instruction'）が完了し，アダムの回復のために必要な「正しい知識」が与えられた時，彼はその回復の過程を「救いの信仰」の段階にまで至らせる。この段階に来て，ミカエルはアダムに対して「よき行ない」を行なうよう，明確に忠告する。

...only add
Deeds to thy knowledge answerable, add faith,
Add virtue, patience, temperance, add love,
By name to come called Charity, the soul
Of all the rest.　(XII, 581-85)

ただ，
お前の知識に相応わしい行ないを加えよ。信仰，
徳，忍耐，節制を加えよ。とりわけ，他のすべてのものの
魂である，聖愛の名で呼ばれることになる
愛を加えよ。

知識に行ないを加えるということは，決して行為によって義とされるということではない。ミルトンが『キリスト教教義論』で説くように，人は信仰によって義とされるのであるが，ただそれは，行ないを伴う「生きた信仰」('a living faith') でなくてはならないということである。[8] われわれはここで，行ないと信仰（そして，徳，忍耐，節制，愛）が並置され，共に，知識に加えるべきものとされていることに注意しなければならない。

信仰は，知識としての信仰に留まらず，それは「生きた信仰」，即ち，「信仰のわざ」('works of faith') にならなければならない，というのがミルトンの主張である。別の言い方をすれば，「わざなしには，「生きた信仰」，「真の信仰」はあり得ない，ということである。[9] そして，そのような信仰に生きることを可能にさせるのは，神の聖霊 (Spirit) である，とミルトンは言う。[10] 従って，アダムは信仰者のうちに聖霊が具体的にどのように働くかを知らされ，そのことによって事実上，聖霊の恵みと導きを体験する者とならなければ，真に再生された人間になったことにはならない，と言えるのである。言い換えれば，アダムは聖霊の力によって「よきわざ」(good works) を行なうことのできる者とならなければならないのである。

ミルトンは，『キリスト教教義論』の 'Saving Faith' の章で，信仰とは，「神を受け入れ，神に近づくこと」('a receiving of God and an approach to God') である，と言っている。[11] そして，神を受け入れ，神に近づくためには，まず，神についての正しい知識がなければならない。そして信仰は，ここから始まって善へと向かうものである。その意味で，信仰の座は知性ではなくて意志である，と述べている。[12]

Henceforth I learn, that to obey is best,
And love with fear the only God, to walk
As in his presence, ever to observe
His providence, and on him sole depend,
Merciful over all his works, (XII, 561-65)

今後は，従うことは最善であり，
唯一の神を恐れをもって愛し，
常にその御前にあるがごとくに歩み
絶えずその摂理を信じ，すべてのみわざに
恵みをたもう神にのみ依り頼み，

上に引用した箇所に見られる一連の動詞，'obey', 'walk', 'observe', 'depend' が表わすものは，「神を受け入れ，神に近づく」以外の何ものでもない。ここに見られるのは，神に対する絶対的

な服従と，信頼と，依存の姿勢である。しかも，この部分を導入する 'Henceforth I learn' ということばには，それまでと違った，静かではあるが強い決意の調子が感じられる。これは，ミカエルへの質問を続けている段階のアダムではない。ここで，アダムは別の人間に生まれ変わっている。再生された人間になったのである。ミルトンは，『キリスト教教義論』の「再生」の章で，再生とは，神のことばと聖霊の力によって，古い人が滅ぼされ，内的人間が，知性においても，意志においても，生まれ変わらされることである，と述べていることに注意したい。[13] この箇所は，アダムが知性においてのみならず，意志においても生まれ変わったことを示すのである。アダムの再生は，ここで完成する。彼のこの最後の応答こそ，知恵の頂点 ('the sum of wisdom') であるとミカエルは言う。知恵とは何か。ミルトンは『キリスト教教義論』の中で，知恵とは，われわれが神の御心を熱心に求めることである，と述べている。[14] 知恵とは，単に，神の救いのわざについて知識を得ることではない。「神を受け入れ，神に近づくこと」を学ぶことである。これは，神から与えられる恵みに対して，信仰と愛をもって応答し，「よきわざ」に励むということである。再生とは，「人が新しい人間となり，肉体においても，魂においても，全く聖なるものとされ，神に仕え，よきわざを行なう者となることである」とミルトンは言う。[15]

アダムが行ないを伴う生きた信仰をもって神に仕え，よきわざを行なうために要請されるのは聖愛 ('Charity') の実践である。それは，いつ愛のないものに転落するかも知れない人間の愛ではない。聖愛の実践とは，情熱を超える神的愛をもって，神と人とを愛することができるように，力の限り努力することである。その意味で，聖愛は目標であり，また希望である。堕落した人間にどうしてそれが可能であろうか。それは，ミカエルによって啓示されたキリストの模範に倣うことによってである。神を愛することがエバを愛することであるような愛を回復する道は，それしかない。そして，大切なことは，そのことによってのみ，アダムは真に回復した人間になってゆくのである。

楽園を追放されるに際して，エバは，アダムの側を離れない決心を述べる。

...but now lead on;
In me is no delay; with thee to go,
Is to stay here; without thee here to stay,
Is to go hence unwilling; thou to me
Art all things under heaven, all places thou,
Who for my wilful crime art banished hence.　(XII, 614-19)

さあ，私をお連れ下さい。
私には，もはやためらいはありません。あなたと一緒に行くのなら，

ここに留まっているのも同然です。あなたなしでここに留まるのは，
心ならずもここから出てゆくのと同じです。
私の身勝手な罪のためにここを追われるあなたは，
私にとっては，天が下にあるすべてのもの，すべての場所です。

これは新たにされた愛である。ウィリアム・ハラーは，ここに引用した詩行について，エバの新たにされた忠誠と服従の中に，人の贖いは予想されている，と述べている。(16) アダムとエバは手を取り合って楽園から出てゆく。エバのこの決心の表明と，彼らが再び手を取り合う行為に，「真の愛」の回復に向かう二人の固い決意が伺われる。彼らが既に知らされた神の愛と，キリストによる罪からの贖いとを信じて，それに正しく応えようと決意し，努力してゆくところに，神の聖なる定めの中にあるキリストの贖いが，既に彼らの現実であること，そして目標であり，希望である二人の「真の愛」が，事実上，回復されているのを見ることができるのである。

注

(1) Don M. Wolfe, gen. ed., *Complete Prose Works of John Milton*, Vol. VI (New Haven : Yale University Press, 1973), p. 468.
(2) *Ibid.*, p. 468.
(3) J.H. Summers, *The Muse's Method* (Chatto & Windus, 1962), p. 183.
(4) E.M.W. Tillyard, *Studies in Milton* (Chatto & Windus, 1951), pp. 13–14.
(5) *Christian Doctrine*, CPW, VI, p. 468.
(6) *Ibid.*, p. 461.
(7) Alastair Fowler, ed., with John Carey, *The Poems of John Milton* (London, 1968), p. 998.
(8) *Christian Doctrine*, *op. cit.*, p. 490.
(9) *Ibid.*, p. 490.
(10) *Ibid.*, p. 492.
(11) *Ibid.*, p. 475.
(12) *Ibid.*, p. 476.
(13) *Ibid.*, p. 461.
(14) *Ibid.*, p. 476.
(15) *Ibid.*, p. 461.
(16) Alan Rudrum, ed., *Milton : Modern Judgement* (Macmillan, 1969), p. 311.